

原子力市民委員会 話題提供 2024年2月8日(木曜)

# 終わらない被災の時間

**Toxic exposure and Communities**

成元哲(中京大学)

福島子ども健康プロジェクト



## 福島子ども健康プロジェクトのホームページへようこそ

[トップページ](#)[プロジェクトの概要](#)[アンケート調査票](#)[研究成果](#)[調査報告書](#)[福島子ども健康プロジェクトだより](#)[サポートブック](#)[ふり返り手帳](#)[調査参加者からのメッセージ](#)[ワークショップ](#)[よくあるご質問](#)[お問い合わせ](#)

### アンケート調査票

福島子ども健康プロジェクトは、2013年から毎年1月にアンケート調査を行っています。3・11の災害・原発事故が人間の「からだ」「こころ」「きずな」に、長期的にどのような帰結をもたらすのかを記録するためです。記録が残らなければ、この地域で起きたこと、各家庭で起きていることが忘れられ、何もなかったことにされてしまうからです。この地域で暮らす人々の生活の移り変わりをまるごと記録として残す、未来のために、これが調査の目的です。

# 話題の概要

## 終わらない被災の時間

原発事故が福島県中通りの親子に与える影響

成 元哲 編著  
牛島佳代 松谷 満 阪口祐介



石風社

- 原発事故は、一度起きてしまうと終わらないものだとすることを、福島県中通りで子育て中のお母さんたちの声からわかった。それを象徴的に表しているのが「未来に対する不安」だと思っんです。

# 将来への不安

- 今は目立った障害はないが、10年後20年後大丈夫か、子どもたちに障害が起こるのではないか
- 福島で生まれ育った子ということできじめ差別を受けるのではないか
- 後から、都合の悪い情報が出てくるのではないか・・・。
- 文学、映画などで用いられる物語技法で、専門用語ではフラッシュフォワードFlashforwardといいます。将来起こるかもしれないことを見せる手法（フラッシュバックが過去を見せるのに対し）

# リスク

- **何でこんなことが起きるか、原発事故はリスクイベントだから**
- リスクとは
- ① 事故被害の発生・そのおそれが、何かをするか放置しておくかについての 人間の決定と結びつく時、リスクという
- ② リスクは **未来において**はじめてその結果を観察できる **未来の問題**。現在において、未来はあくまでも未知である。
- ③ 同じ出来事でも **リスクの見方**は **一様ではない**。ある人の怖いといったものは **認知・感覚的なもの**で、同じ出来事でも、人の性格やその人が置かれた環境によって違う受け止め方（反応）をするから。 **未知をめぐるコンフリクトが生じやすい**

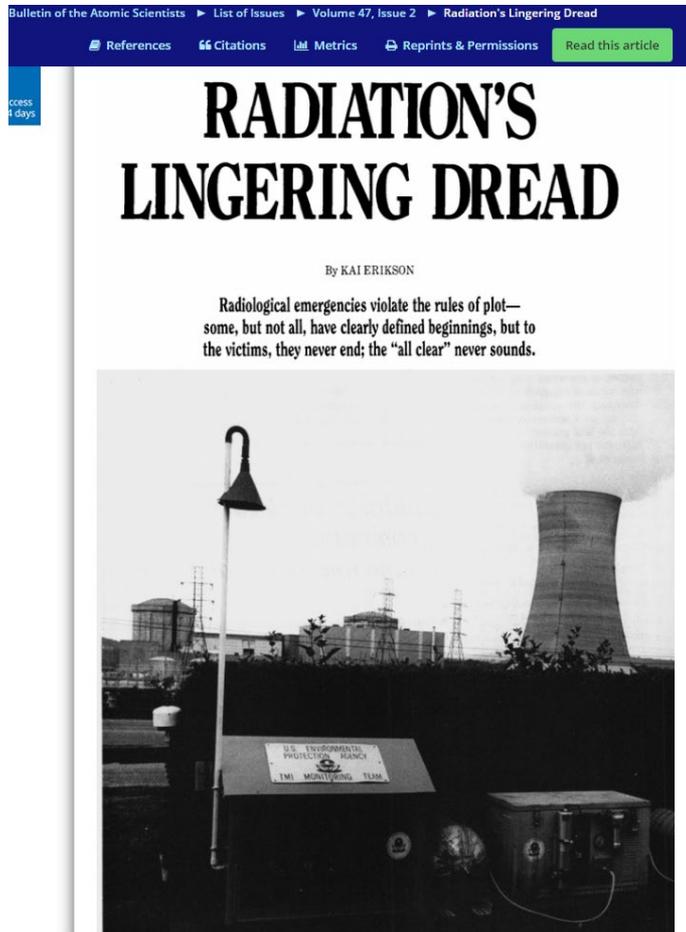
# 未知(リスク)をめぐるコンフリクト

- 単に事実として「客観的に」与えられた関連知識の欠如ではなく、何よりも、知られていないこと、あるいは、知られるはずのないことの認識、定義、評価、コミュニケーションに関する対立である
- この対立の溝は埋まりにくい
- リスク研究で、有害事象の発生可能性と発生確率から、リスク、不確実性、多義性、無知に分類
- 偽情報(フェイク)が出回りやすい

# とり得る対策

- ➡こんな時に必要なこと？
- 知識が不確実なときは、メッセージを単純化するのではなく、複雑なまま伝える(**Keep it complex**)
- 時間が経過し、不安が薄まっているが、もやもやした感覚、語れない思い、隠された物語をたくさん抱えている
- 「理解」を強いる短期的な宣伝やイベントではなく、**気になる・怖いと感じる人が言える環境、その不安に寄り添う長期的に粘り強い施策を続けること**

# TMIでも同じだった



- 社会学者カイ・エリクソン (Kai Erikson) のTMIの被害者の取材から
- 放射線緊急事態は起承転結といった筋書きのルールに反している。すべてではないが、始まりが明確に定義されているものもあるが、被害者にとっては決して終わることはなく、「オールクリア」が決して鳴り響くことはない。
- RADIATION'S LINGERING DREAD. By KAI ERIKSON. Bulletin of the Atomic Scientists Volume 47, 1991 - Issue 2

# コミュニティが傷つく

- しばしば**コミュニティを形成する有機的な組織**は、心や身体の組織が傷つけられるのとまったく同じくように**傷つけられる**ということだ。しかしそのようなことが起こらない場合でも、トラウマにより個人が受けた傷は、**寄せ集まってひとつの雰囲気、ほとんど集団の文化と呼べるひとつのエートスを作り上げることがある**。それはその集団を形成する個々人の受けた傷の単なる集合とは異なっているし、またそれ以上のものである。つまり、トラウマには社会的側面があるのだ
- (Kai Erikson, 1995 “Notes on Trauma and Community” 権田建二訳)

# 久しぶりに全国紙朝刊にこそって一面 トップに

- 水俣病被害者救済法(特措法)で救済を受けられなかったのは違法だとして、大阪府などに住む50~80代の**128人**が国や熊本県、原因企業チツソに1人あたり450万円の損害賠償を求めた「**ノーモア・ミナマタ近畿訴訟**」の判決が27日、大阪地裁でありました。達野ゆき裁判長は原告全員が水俣病だとし、国などに賠償を命じました。(朝日新聞2023年9月27日)

# 頼るべき村とおもえど村の病む

- 地元は、判決の数日前、裁判に関する報道が始まってからざわつき始めました。通勤途中、散歩の途中で呼び止められて、「まだ裁判やっとするのか」「負けるやろうな」「今更やもん」という声を聞き、判決が出たあとその声は、「どうせ控訴される」「せっかく終わりかけとったとに」「あの判決はおかしか」という声になりました。この声は、水俣では多数派な気がしますが、私はその近所の人々が水銀の被害を受けて、水俣病の手帳を持っていることを知っています。でも水俣病を終わらせたい、その感情は複雑です。永野三智「水を育む」『現代思想』2023年11月号、29頁
- 祈るべき天とおもえど天の病む（石牟礼道子）

# 修復的なアプローチ



- 「語れない」物語、不安に寄り添う施策が必要
- 1. (安心・安全感の欠如から)環境を調整する
- 2. (無力感・自己統御感覚の欠如から)自己(主体、セルフ)を再建する
- 3. 記憶・経験を処理する
- 4. 社会とのつながりを回復する